

東海学院大学・東海学院大学短期大学部公開講座 2024

「はつらつと生きる ～大学は知の宝庫～」

第4回 11/12 (火) 13:30～15:00 報告

“心の友”となる絵本

講師 杉山 喜美恵 (本学教授) 於：図書館大セミナー室

◆◆◆◆◆◆*◆◆◆*◆◆◆*◆◆◆*◆◆◆*◆◆◆*◆◆◆*◆◆◆*

令和6年度第4回公開講座(受講者40名)が11月12日に本学図書館大セミナー室で開催されました。幼児教育学科教授でいらっしゃる杉山喜美恵先生は幼稚園教諭と保育士の養成に携わっておられ、来年度より「認定絵本土」養成講座の主担当を務められています。絵本専門士や読書アドバイザーとして地域の幼稚園や学校、図書館、医療機関など様々に出向かれご活躍されています。また、岐阜県保育研究協議会のファシリテータや保育士等キャリアアップ研修の講師、子ども・子育て会議委員長や、県の子どもの読書活動推進計画検討委員など多くに携わっておられます。「絵本専門士」は、絵本に関する専門家で、「子どもの感性を育てる絵本の世界」「発達にあった選書と読み聞かせの特徴」など、聞いてみたいご講座を多く開催してこられました。

今回の「“心の友”となる絵本」と題された講演では、大人になってからでも、絵本の癒しの力や効果を様々な絵本紹介から体験し、実感していきました。

デジタルとは違う紙の絵本には、紙の質や大きさなど人のように個性があり、デジタルが普及し、本を読む機会が少なくなった時代での共存についてもお話下さいました。

仕掛け絵本や細長い絵本、海外の絵本など、たくさんの絵本を用意して下さい、読み聞かせの実演も行いました。

絵本に出会った時の感動や、絵本を楽しむ機会の1つとして、仕掛け絵本や形の違う絵本があります。『おめんです』(作:いしかわこうじ、偕成社、2013)は、お面の仕掛け絵本で「次はだれだろう?」と子どもたちが考え、次々に言ってくれる参加型絵本です。『せかいいちながいゾウさんのおはな』(作:谷口智則、文溪、2019)は、ジャバラスタイルの細長い絵本です。一つ一つの出会いから大切な出会いへと繋がり、本の形態からより理解しやすいものとなっていました。

赤ちゃん絵本では、ミリオンブックになっている絵本が多数あります。『いないいないばあ』(文:松谷みよ子・絵:瀬川康男、福音館書店、2006)は、日本で一番出版されているという情報を下さいました。『だるまさんが』(作:かがくいひろし、ブロンズ新社、2008)はシリーズ絵本で、「どてっ」「ぷしゅーっ」など子どもが喜び、保育園で一番読まれている絵本との調査結果をお話下さり、子育て支援で行かれた時もよく読む絵本だと紹介下さいました。『ぐりとぐら』(作:中川李枝子・絵:大村百合子、福音館書店、1967)、『ねないこ

だれだ』(作・絵せなけいこ、福音館書店、1969)など、多くの作家さんが絵本業界を引っ張って来られ、小さい頃読んでもらったことが語り継がれ、温かさなどを思い出すことも大きな魅力であると伝えて下さいました。

死や再生、命の繋がりなどの絵本には、『くまとやまねこ』(作：湯本香樹実・絵：酒井駒子、河出書房新社、2008)は、近しい死をどう受け止めるか、友情の大切さを優しく教えてくれる絵本ということで、ドラマでも使われていましたと紹介がありました。「あっ、あの時の映像で見た」とあれはそういう意味でもあったのか、とさらにイメージを膨らませることができました。モノトーンで描いている画家にも注目がされ、『橋の上で』(文：湯本香樹実 絵：酒井駒子、河出書房新社、2022)も同じ作家が作画されており、大人になると画を味わったり行間を読むこともでき、人生や死について、自分の中で考えたりもできるのが絵本だと知りました。

『海にしずんだクジラ』(作：メリッサ・スチュワート・絵：ロブ・ダンラヴィ訳：千葉茂樹、BL出版、2023)と『クジラがしんだら』(作：江口絵理・絵：かわさきしゅんいち監修：藤原義弘、童心社、2024)は、同じテーマで書かれており、命はたくさんの命から繋がっていること、新しい技術や多くの知識などが得られる絵本であるが、国により書き方が違うなど多くの視点を戴きました。

『おじいちゃんのおじいちゃんのおじいちゃんのおじいちゃん』(作・絵：長谷川義史、BL出版、2000)は、命をつないで自分がいると感じ取れるように、縦軸に切っている絵本で、同じ作者でも『ぼくがラーメンたべてるとき』(作・絵：長谷川義史、教育画劇、2007)は、今の瞬間に世界の子どもは何をしているのかと言った横軸に切っている絵本であるとのことでした。

『イエローバタフライ』(作：オレクサンドル・シャトヒン、講談社、2023)は、ウクライナの作家の絵本で、女の子の目を通した「戦争」が文章の無い絵本として描かれ、考えさせられるものです。

現代の社会問題を考えさせる絵本としては、プラスチックのゴミに鳥が苦しむSDGSの絵本、性的虐待への処罰として日本版DBSの最新情報など紹介下さりながらプライベートゾーンの絵本、保育者がバイアスに気づくことが重要であることなどを絵本の紹介を通してお話下さいました。

多様性や価値判断については、『ぼくらのサブウェイ・ベイビー』(作：ピーター・マキューリオ・絵：レオ・エスピノーサ 訳：北丸雄二、サウザンブックス社、2022)は、ジェンダー・フリーの考えを深めるもので、これは実話であり、絵本は創作だけではないことも教えて下さいました。『オレ、カエルやめるや』(作：デヴペティ・絵：マイクボルト 訳：小林賢太郎、マイクロマガジン社、2017)は、自分という存在の自己肯定に繋がる絵本です。『ひとりぼっちのかいぶつといしのうさぎ』(作・絵：クリス・ウォーメル訳：吉上恭太、徳間書店、2004)は幸福についても考えさせられる絵本です。

このように、絵本には様々あり、子どもたちにとっては、感性や理解力を育み、豊かな人格形成をもたらすものですが、大人としても絵本に触れることで、深く考えたり、心を動かすことで情操を豊かにしたり、多くの作用があることに気づかされました。多くの絵本の提示と紹介から、毎日を「はつらつと生きる」ために心に寄り添ってくれる友のような絵本との出会いを探してみたいと思いました。

御講義が終わった後も、質問に対して丁寧に温かい雰囲気でお話される杉山先生と多くの絵本を手にとったり、周りの受講の方々と和気藹々と話されたり、絵本の存在そのものが作り出す雰囲気がありました。この講座がとても楽しいひと時となりました。

【講座の様子】

